

酸ヶ湯温泉

伝統的な素朴さを大規模で

酸ヶ湯温泉は、十和田八幡平国立公園内にある他の温泉旅館よりもはるかに大規模につくられています。客室数は 140 室で、250 人が宿泊可能です；看護師まで常駐しています。八甲田山系の山腹に位置する酸ヶ湯温泉は、風光明媚な自動車道に面しており、夏には山々をめぐる数多くのハイキングコースにアクセスでき、冬はバックカントリースキーが楽しめます。

この温泉は、1684 年に初めて発見され、1902 年までには複数の浴場が顧客の獲得合戦を繰り広げていました。やがて、競争よりも協力の方が商売に役立つと気づいた経営者たちは、1933 年に合併して酸ヶ湯温泉という一つの会社を設立しました。1934 年には県庁所在地の青森から酸ヶ湯温泉行きバスの運行が開始し、1936 年には周辺の十和田八甲田地域が国立公園に指定されました。

第二次世界大戦後まもなく、酸ヶ湯にはさらなる追い風が吹きました。1954 年、酸ヶ湯温泉は群馬四万温泉、日光湯元温泉とともに日本で最初の国民保養温泉地三か所の一つに指定されました。「昔は温泉というと、いかがわしい遊びをするところというイメージがありました。そのイメージを変えたいという政府の意向を受けて、この温泉がモデルとして選ばれたのです」と 酸ヶ湯温泉宿泊営業チームの高田新太郎さんは説明します。

その市場は依然として比較的地域の客層に限られていたものの、酸ヶ湯温泉は繁盛しました。1950年代、宿の前のコンコースは日本全国どこ行きの切符でも買うことができるバスターミナルでした。多くの従業員が住み込みで働いていた上、この地域は町から遠く離れていたため、酸ヶ湯温泉は国政選挙の投票所としても使われました。

しかし、酸ヶ湯温泉を今日の人気へと押し上げたのは、鉄道網の飛躍的な改善と青森県による冬季観光振興の取り組みによって実現した通年アクセスでした。この取り組みでは、温泉とスキーリゾートの両方が推進されました。その一環として、青森県は酸ヶ湯温泉へのアクセス道路の除雪を開始し、冬でも車やバスが通れるようにしました。(酸ヶ湯周辺は日本一の豪雪地帯とされています)。

従来、人々は酸ヶ湯を訪れると、3 日間身体を慣らしながら療養するサイクルを 3 回繰り返す、約 10 日間の湯治を行いました。専業農家の人口減少やその他のライフスタイルの変化により、そのような長期滞在者は減少していますが、それでもまだ存在しています。最近では 60 代の日本人夫婦が 40 泊しました。「この場所は小さな町のようなものです」と新太郎さんは言います。「住み込みの従業員がいるし、毎年長期間滞在する湯治客もいます。みんな仲良くなるんです」